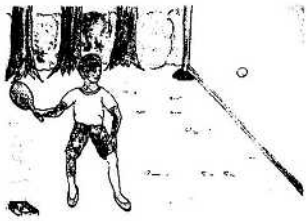
伝説のテニスプレイヤー

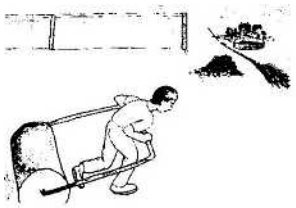
佐藤 次郎（さとう じろう）物語

群馬県渋川市立長尾小学校「道徳」教材より

佐藤次郎は小学校に入ると間もなく、兄とテニスを始めました。小さい板をけずってラケットがわりにし、自分の家の庭で、一人の時は、家の壁を相手に練習をしていました。
学校にはラケットがあり、3，4年生のころは、兄と二人きりで、放課後だれもいなくなるまで練習していて、先生に注意されることもたびたびあったそうです。しかし、上級生や先生たちが相手をしてくれることもあって、力がめきめきついてきました。そのうち、上級生も先生も歯が立たたなくなりました。



ほかの勉強も得意でしたが、勉強もがんばり、1年から6年まで抜群の成績で、クラスの友達からの信頼も厚く、責任感も強いので、毎年学級委員をするほどでした。
その後、渋川中学（今の渋川高校）に進学してテニス部に入りました。
校庭は軽石がごろごろしていて、まともなテニスコートがありませんでした。
そこで、コート作りをすることになりました。



とてもきつく、部員にとっては最もいやな仕事でした。
しかし、入部してすぐに正選手になった次郎は、中心になってこの仕事に取り組みました。
コートの土をふるい、学校近くの工場から石炭がらをもらってコートに敷き、さらにローラーを借りてきて、コートを固めました。こうしてできあがったコートは、日曜も休日も、毎日使えるようになったそうです。

また、練習をすると決まった日は、たとえ雨でもコートに出かけ、ほとんどの部員が休んでいるのに、彼一人他の部員が来るのを待っていたそうです。「約束というのは、何人かの人の間で成立すのもので、一人の身勝手な判断から遅刻したり休んだりはできない。」というのが真面目な次郎の考え方でした。
次郎は「弱きを助け、強きを敬う」という言葉を好みました。彼の高度なテニスの技術は、外国の強い選手から学んだものでした。さらに、「勝利は技術だけではとれない。全人格でとるのだ」と考え、より高い目標を立て、それに向かって強い意志と実行力で取り組みました。彼のテニスはみるみる進歩したそうです。

次郎の技術の高さに加え、コートマナーの良さは外国の人々にも高く評価され、新聞でも取り上げられました。外国で地元選手と試合をする時にも、外国の観客の多くが、次郎を応援しました。
そのころの日本は、まだあまり世界に知られていない国でしたが、次郎の活躍は、外国での日本の評価を高め、多くの日本人に勇気を与えました。
昭和5年には、日本チャンピオンになり、世界タイトルを目標に、ヨーロッパで日本代表の一員として戦いました。ドイツを破り日本がベスト4に入る原動力になりました。彼は、ウィンブルドンではシングルスでベスト4、ダブルスでは布井良助と組んで準優勝、その結果、世界ランキング3位という記録を獲得し、日本中がわきたちました。この記録は、日本人の史上最高の記録として今でも破られてはいません。

【 備考 】

佐藤 次郎（さとう じろう、1908年（明治41年）1月5日 - 1934年（昭和9年）4月5日）は、群馬県に誕生し、旧制渋川中学校（現渋川高等学校）、早稲田大学を卒業後、1930年代前半に日本の男子テニス選手として空前絶後の世界的な活躍を残し、当時の世界ランキング3位にまで登り詰めながら、そのキャリアの途上で亡くなった伝説の名選手である。
1934年（昭和9年）2月、佐藤は「テニスファン」記者の1人であった岡田早苗との婚約を発表した。

この年の3月20日、佐藤はデビスカップの日本チーム主将として「箱根丸」でヨーロッパ遠征に出発するが、その帰途にあった4月5日に、マラッカ海峡にて投身自殺を遂げた。まだ26歳の若さだった。
箱根丸の彼の船室には、数通の遺書が残されていた。ペリーやクロフォードなど、当時の男子テニス界の頂点にあった選手たちと互角に戦ってきた佐藤の突然の死は、世界のテニスファンにも大きな衝撃を与えた。
「当時の観客は（佐藤の試合を通して）生死をかけた闘いを見ていることに気づかなかった。
（外国人の観点では）探り得ない佐藤の心は（5度の準決勝敗退を）天皇と日本国民を失望させる、耐え難い屈辱とみなした」・・・そういう価値観の時代背景の中で一生懸命に生きたテニスプレイヤーである。

1908 ←――――――――→ 1934

1914 ←→ 1918　　1939 ←→ 1945

第一次世界大戦　　第二次世界大戦